

八 满州国をめぐる諸問題

1 一般問題

1178

昭和11年2月7日 在滿州國南大使より

広田外務大臣宛(電報)

現地実情視察および警察官身分処置問題への
対応方針の迅速決定など滿州國治外法權撤廃
問題に関する全滿領事会議要望について

新 京 2月7日夜発

本 省 2月7日夜着

ト

第一〇〇號
一月二十九日ヨリ三十一日迄三日間當館ニ於テ全滿領事會
議開催治外法權撤廃及附屬地行政權調整ニ關スル諸般ノ問
題就中民會課金ノ處理、十一年度教育費豫算及警察官移讓
ノ件等ニ付審議研究ヲ遂ケタリ同會議ニ於テ領事全部一致
セル意見トシテ法權撤廃ノ準備工作ニ遺算ナキヲ期シ以テ
其ノ遂行ヲ圓滑ナラシムル爲一方ニ於テ在滿外務各機關間

齊齊哈爾ヨリ白城子ヘ轉報アリタシ
在満各領事へ轉電セリ

ノ聯絡ヲ今後一層密ナラシムルト共ニ他方本省ニ於テ左記
二點ニ特別ノ考慮ヲ拂ハレ度シトノ熱心ナル希望アリタル
處右ハ頗ル機宜ノ措置ト認メラルヲ以テ之カ實現方御配
慮ヲ請フ
⁽¹⁾、本省ニ於ケル治外法權問題關係係官ヲ出來得ル丈ヶ屢現
地ニ派遣シ第一線勤務者(警察派遣所等ヲモ含ム)ノ實情
ヲモ篤ト視察シ且其ノ意嚮ヲ充分聽取セシメラ度キコ
ト
二、法權撤廃ニ伴フ警察官ノ身分處置特ニ人事工作及待遇等
諸問題審議ノ爲本省内ニ有力ナル委員會ノ如キ適當ノ機
關ヲ設置シ至急右ニ關スル方針ヲ確定スルト共ニ成ルヘ
ク早目ニ之ヲ關係者ニ内示シ以テ人心ノ安定ヲ計ラレ度
キコト
在満各領事へ轉電セリ

輿論ノ充分ナル支持アル強力政府ノ下ニ秩序的發展ヲ示シ
ツツアリトスルモノニテ最近ノ同國政情ニミルモ右感想力
同國國內情勢ノ忠實ナル描寫ナル事疑ヲ容レストレス日本ノ
問題ニ關スル「リ」所說ハ一般的同意ヲ得難カルヘシ日英

ハ支那ニテ協力シ得ヘク然ル時其結果ハ全關係者ニ良好ナ
ルヘシ併乍ラ且下ノ所日本カ眞ニ商議ニ應スル用意アリト
信スル事多少困難ナリトノ趣旨ノ社説ヲ掲ケタリ
本信寫送付先 北平、上海

1179 昭和11年5月30日 在滿州國植田大使より
有田外務大臣宛(電報)

オーストラリアに対する通商擁護法發動が満
州國へ与える影響に鑑み同法に関するわが方
の具体的措置振り回示方請訓

オーストラリアに対する通商擁護法發動が満
州國へ与える影響に鑑み同法に関するわが方
の具体的措置振り回示方請訓

新 京 5月30日後発
本 省 5月30日後着

第四八三號(極秘)

貴電第四〇九號^(編付)ニ關シ(濠洲產小麥及小麥粉輸入阻止ニ關
スル件)

滿側ニ於テハ主義上本件協力方異存ナキモ右實施ニ關聯シ
民衆ノ生活及將來ニ於ケル滿洲國ノ小麥ニ關スル各種政策
等ニ惡影響ヲ及ホサルコト並ニ必要ニ應シテハ滿側ノ對
日貿易ヲ積極的ニ日本側ニテ援助セラレ度キコトヲ條件ト
シ度キ意嚮ナルカ何レニスルモ日本側ノ具体的方策判明ス
ル迄ハ細目ニ付決定シ得サル事情アリニ十九日外交部、實
業部、財政部等關係官廳間ニ委員會ヲ組織シ直ニ研究ニ着手セリ就テハ日本側ノ具体的措置振及對濠通商擁護法發動ノ爲ニ日本國ノ蒙ルコトアルヘキ影響等ニ關スル詳細ノ調

査至急御送付アリタシ

編注『日本外交文書』昭和期II第一部第五卷第269文書。

1180 昭和11年6月10日調印

付記一 昭和十二年十一月五日調印

滿州國における本邦人の居住および滿州國の
課稅等に関する日本國滿州國間條約

付記二 昭和十二年十一月五日公表

滿州國における治外法權の撤廃および南滿州
鐵道付屬地行政權の移讓に関する日本國滿州
國間條約

付記三 昭和十二年十一月五日公表

東亜局作成、「昭和十二年度執務報告 第二
冊(第一課及第三課關係)」(昭和十二年十二
月)より抜粋

右撤廃および移讓に関する條約調印に関する
廣田外務大臣談
三 東亜局作成、「昭和十二年度執務報告 第二
冊(第一課及第三課關係)」(昭和十二年十二
月)より抜粋
右撤廃および移讓に関する條約締結の経緯

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅
等ニ關スル日本國滿洲國間條約

大日本帝國政府ハ昭和七年九月十五日調印ノ日本國滿洲國
間議定書ノ趣旨ニ據り滿洲國ノ健全ナル發達ヲ促進シ且日
滿兩國間ニ現存スル緊密不可分ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ナラシ
ムル爲現ニ日本國ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權ヲ漸進的
ニ撤廢シ且南滿洲鐵道附屬地行政權ヲ調整乃至移讓スルコ
トニ決シタルニ因リ

滿洲帝國政府ハ右日本國政府ノ決定ヲ多トスルト共ニ之ニ
對應シテ日滿兩國臣民ノ滿洲國領域内ニ於ケル融合發展ヲ
確保増進スルノ必要ナルヲ認メタルニ因リ

兩國政府ハ日本國ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權及南滿洲
鐵道附屬地行政權ニ關シ先づ日本國臣民ノ居住及各種權利
利益ノ享有並ニ滿洲國ノ課稅、產業等ニ關スル法令ノ適用
ニ付左ノ通協定セリ

第一條

滿洲國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ一切ノ權利ノ享有及利
益ノ享受ニ關シ滿洲國臣民ニ比シ不利益ナル待遇ヲ受クル
コトナカルベシ

第二條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ本條約附屬協定ノ定ム
ル所ニ從ヒ同國ノ課稅、產業等ニ關スル行政法令ニ服ベ
シ

南滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ日本國政府ハ前項ノ滿洲國法
令ガ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ屬地的ニ施行セラル
コトヲ承認ス

本條ノ適用ニ關シ日本國臣民ハ如何ナル場合ニ於テモ滿洲
國臣民ニ比シ不利益ナル待遇ヲ受クルコトナカルベシ

第三條

前二條ノ規定ハ之ヲ法人ニ適用シ得ル限り日本國法人ニ適
用スルモノトス

第四條

本條約ノ規定ハ日滿兩國間ノ特別ノ約定ニ基ク特定ノ日本
國ノ臣民又ハ法人ノ權利、特權、特典及免除ニ影響ヲ及ボ
商工業其ノ他公私各種ノ業務及職務ニ從事スルコトヲ得ベ
ク且土地ニ關スル一切ノ權利ヲ享有スベシ

第五條

本條約ハ昭和十一年七月一日即チ康徳三年七月一日ヨリ實
施セラルベシ

第六條

本條約ノ正文ハ日本文及漢文トシ日本文本文ト漢文本文ト
ノ間ニ解釋ヲ異ニスルトキハ日本文本文ニ依リ之ヲ決ス
右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本條
約ニ署名調印セリ

昭和十一年六月十日即チ康徳三年六月十日新京ニ於テ本書
二通ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使 植田謙吉(印)

滿洲帝國外交部大臣 張燕卿(印)

附屬協定

本日滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ
關スル日本國滿洲國間條約ニ署名スルニ當リ兩國全權委員
ハ左ノ通協定セリ

第一條

滿洲國政府ハ從來日本國臣民ノ有スル商租權ヲ其ノ內容ニ

應ジ土地所有權其ノ他ノ土地ニ關スル權利ニ變更スル爲速
ニ必要ノ措置ヲ執ルベシ

第二條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國ノ課
稅、產業等ニ關スル行政法令ノ範圍及其ノ適用ノ態様ハ豫
メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部
大臣トノ間ニ協議決定セラルベシ

前項ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ付満
洲國政府ニ於テ重要ナル變更ヲ加ヘントスルトキハ日本國
臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄豫メ滿洲帝國
駐劄大日本帝國特命全權大使ノ承認ヲ經ベシ

本條第一項ノ規定ニ依リ條約實施後直ニ協議決定セラルベ
キ滿洲國法令ハ概本地稅、契稅、營業稅、法人營業稅、出
產糧石稅、木稅、鑛業稅、鑛業登錄稅、酒稅、捲稅、統
稅、商業登記稅、特許登錄稅、意匠登錄稅及地方稅ニ關ス
ル課稅法令並ニ工業所有權、度量衡、計量、鑛業、市場、
畜產、金融及專賣ニ關スル行政法令ニ限ラルベシ

滿洲國政府ハ前項ニ掲タル諸稅中營業稅及法人營業稅並ニ
地方稅中房捐及戶別捐ヲ日本國臣民ニ課スルニ當リテハ條
款アルモノハ同附屬地ニ施行セラレザルベシ右ノ特ニ南滿
洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アル法令ノ範圍ハ豫
メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部
大臣トノ間ニ協議決定セラルベシ

滿洲國政府ハ前項ノ規定ニ鑑ミ其ノ警察制度ヲ整備スベシ
且關係日本側ノ施設及職員ノ引繼ニ付必要ナル準備ヲ爲ス
ベシ

約實施後當分ノ内豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大
使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルル所ニ從
ヒ輕減稅率ヲ適用スベク地方稅中營業稅附加捐ハ右輕減稅
率ニ依ル稅額ヲ基準トスベシ但シ條約實施後直ニ適用スベ
キ輕減稅率ハ營業稅、戶別捐及個人ニ賦課スル房捐ニ付テ
ハ原稅率ノ四分ノ一タルベク法人營業稅及法人ニ賦課スル
房捐ニ付テハ原稅率ノ三分ノ一タルベシ

第三條

府ニ歸屬スベシ

第四條

日本國政府ハ別ニ滿洲國政府ト協定スル所ニ從ヒ遲クトモ
昭和十二年十二月三十一日即チ康徳四年十二月三十一日迄
ニ滿洲國領域内ニ於ケル行政警察ヲ撤廢又ハ移讓スベク右
撤廢又ハ移讓ニ至ル迄ハ條約第二條ノ滿洲國法令中課稅ニ
關スルモノ及特ニ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關
係アルモノハ同附屬地ニ施行セラレザルベシ右ノ特ニ南滿
洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アル法令ノ範圍ハ豫
メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部
大臣トノ間ニ協議決定セラルベシ

滿洲國政府ハ前項ノ規定ニ鑑ミ其ノ警察制度ヲ整備スベ
シ且關係日本側ノ施設及職員ノ引繼ニ付必要ナル準備ヲ爲ス
ベシ

日本國政府ハ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ノ移讓ニ
至ル迄同附屬地内外ニ於ケル日本國臣民ノ課稅上ノ負擔均
衡ヲ確保スル爲條約實施ノ日ヨリ滿洲國力日本國臣民ニ課
稅ト成ルベク同様ノ課稅ヲ同附屬地ニ於テ實施スベシ

前項ノ場合ニ於テハ日本國領事官ハ領事裁判ノ一般準則ニ
從ヒ滿洲國當該法令ヲ適用スベシ但シ右法令ニ掲タル刑罰
中有期徒刑トアルハ懲役又ハ禁錮、拘役トアルハ懲役若ハ
禁錮又ハ拘留、罰金トアルハ罰金又ハ科料、過怠金トアル
ハ過料ト看做シテ之ヲ適用スベシ

本條ノ規定ニ依リ罰金、科料、過料又ハ沒收物ハ滿洲國政
府場合ニ於テ其ノ罰金、科料、過料又ハ沒收物ハ滿洲國政
府

滿洲國政府ハ日滿兩國政府ガ別ニ協定スル所ニ從ヒ南滿洲

鐵道附屬地ニ於ケル南滿洲鐵道株式會社ノ土木、教育、衛生等ニ關スル施設ノ處理ヲ經タル後ニ非ザレバ同附屬地ニ於テ地方稅ヲ課セザルベシ

第五條

條約第二條ノ規定ニ依リ滿洲國法令ガ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セラルト同時ニ滿洲國政府ハ豫メ滿洲帝國駐劄大臣本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラル所ニ從ヒ關係日本側ノ施設及職員ヲ右施行當時ノ狀態ニ於テ引繼グベシ

第六條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ關スル滿洲國當該官憲ノ行政處分ニ對シ日本國臣民ニ於テ不服アルトキハ滿洲國政府ハ之ガ救止ニ付適當ナル措置ヲ講ズベシ

第七條

本協定ノ條項ニ從ヒ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラレタル事項及滿洲國政府ガ同大使ノ承認ヲ經タル事項ハ夫々日滿兩國ノ

官報ニ公示セラルベシ

第八條

本協定ハ條約ト同時ニ實施セラルベシ
右證據トシテ兩國全權委員ハ本協定ニ署名調印セリ

昭和十一年六月十日即チ康德三年六月十日新京ニ於テ之ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使 植田謙吉(印)

滿洲帝國外交部大臣 張燕卿(印)

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約及附屬協定ニ關ス

ル日滿兩國全權委員間了解事項

第一 條約第一條ニ付

未開放蒙地ニ於テ日本國臣民ガ土地ニ關スル權利ヲ取得スル場合ニハ滿洲國當該官憲ノ許可ヲ要スルモノトス

一 滿洲國政府ハ滿洲國領域内ニ於テ現ニ日本人居留民團體ガ日本國臣民ノ教育事業ヲ經營シ居ルノ事情ニ鑑ミ
ミ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外

第二 條約第二條ニ付

交部大臣トノ間ニ協議決定セラル所ニ從ヒ日本國臣民ノ教育事業ニ要スル費用ヲ毎年分擔スベシ
二 滿洲國政府ハ現行租稅制度ヲ更ニ整備スベシ
三 滿洲國政府ハ條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ノ適用ニ當リ日本國臣民ガ日本國法令又ハ慣行ニ依リ現ニ享受スル權利又ハ利益ノ保護ニ付必要ナル措置ヲ講ズベシ

第三 附屬協定第四條ニ付

南滿洲鐵道附屬地内ニ於テ生産セラレ同附屬地外ニ於テ消費セラルル物品及同附屬地外ニ於テ生産セラレ同附屬地内ニ於テ消費セラルル物品ニ對スル消費稅ノ賦課徵收ニ關シテハ日滿兩國當該官憲間ニ於テ協議決定スベシ
昭和十一年六月十日即チ康德三年六月十日新京ニ於テ

植田謙吉(印)

張燕卿(印)

第一條

(付記一)

滿洲國ニ於ケル治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附屬地行政權ノ移讓ニ關スル日本國滿洲國間條約

日本國政府ハ南滿洲鐵道附屬地行政權ヲ本條約附屬協定ノ

日本國政府ハ現ニ日本國ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權ヲ

本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ撤廢スベシ

日本國政府ハ南滿洲鐵道附屬地行政權ノ移讓ニ關シ兩國間ノ關係ヲ

兩國政府ハ日本國ガ現ニ滿洲國ニ於テ有スル治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附屬地行政權ノ移讓ニ關シ兩國間ノ關係ヲ規律センガ爲左ノ通協定セリ

定ムル所ニ從ヒ滿洲國政府ニ移讓スベシ

第三條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ同國ノ法令ニ服スベシ

前項ノ規定ノ適用ニ關シ日本國臣民ハ如何ナル場合ニ於テモ滿洲國人民ニ比シ不利益ナル待遇ヲ受クルコトナカルベシ

前二項ノ規定ハ之ヲ法人ニ適用シ得ル限り日本國法人ニ適用スルモノトス

第四條

日本國法令ニ依リ成立シタル會社其ノ他ノ法人ニシテ本條約實施當時滿洲國ノ領域内ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スルモノハ本條約ノ實施ト同時ニ滿洲國法令ニ依リ成立スル

同種ノ會社其ノ他ノ法人又ハ最之ニ類似スル法人ト認メラルベシ

滿洲國政府ハ日本國法令ニ依リ成立シタル會社其ノ他ノ法人ニシテ本條約實施當時滿洲國ノ領域内ニ支店又ハ從タル事務所ヲ有スルモノノ成立ヲ承認ス

第五條

本條約ノ正文ハ日本文及漢文トシ日本本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニスルトキハ日本本文ニ依リ之ヲ決ス
右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本條約ニ署名調印セリ

第六條

本條約ハ昭和十二年十二月一日即チ康德四年十二月一日ヨリ實施セラルベシ

第七條

本條約ノ正文ハ日本文及漢文トシ日本本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニスルトキハ日本本文ニ依リ之ヲ決ス
右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本條約ニ署名調印セリ

昭和十二年十一月五日即チ康德四年十一月五日新京ニ於テ本書二通ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使 植田謙吉(印)
滿洲帝國國務總理大臣 張景惠(印)

附屬協定(甲)

本日滿洲國ニ於ケル治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附屬地行政權ノ移讓ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ署名スルニ當リ

第六條

兩國全權委員ハ左ノ通協定セリ

第一章 裁判管轄

第一條

滿洲國ニ於テ日本國臣民ノ爲ニ存スル領事裁判制度ハ條約實施ト同時ニ終止スベク爾後日本國臣民ハ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スベシ

第二條

滿洲國政府ハ日本國臣民ノ身體及財產ニ對シ國際法及法ノ一般原則ニ適合スル裁判上ノ保護ヲ保障スベキコトヲ約ス

第三條

條約實施當時日本國領事裁判所ニ於テ未決ニ係ル民事及刑事ノ訴訟事件並ニ非訟事件ニ關シテハ引續キ從前ノ例ニ依リ處理セラルベク日本國ノ裁判管轄權ハ此ノ目的ニ付テハ十分ノ效力ヲ持続スベシ

前項ノ規定ニ依リ處理セラルベキ事件ニ關シテハ滿洲國當該官憲ハ日本國當該官憲ノ請求ニ應ジ該事件ニ關スル一切ノ事項ニ付援助ヲ與フベシ

第四條

條約實施前ノ日本國臣民ノ行爲ニ付テハ右行爲ガ行爲當時

本條約ノ規定ハ日滿兩國間ノ特別ノ約定ニ基ク特定ノ日本國ノ臣民又ハ法人ノ權利、特權、特典及免除ニ影響ヲ及ボサザルモノトス

第六條

本條約ハ昭和十二年十二月一日即チ康德四年十二月一日ヨリ實施セラルベシ

第七條

滿洲國政府ハ條約實施前日本國領事官ガ日本國法令ニ依リ作成セラレタル債務名義ノ效力ヲ承認ス本協定第三條第一項ノ規定ニ依リ處理セラル事件ニ關シ作成セラレタルモノニ付亦同ジ

第八條

滿洲國政府ハ條約實施前日本國領事官ガ日本國法令ニ依リ爲シタル登記ニ付満洲國當該官憲ガ満洲國法令ニ依リ爲シタルト同一ノ效力ヲ認ムベシ

第二章 南滿洲鐵道附屬地ノ行政

第九條

日本國政府ハ條約實施ト同時ニ南滿洲鐵道附屬地ノ課稅、警察、通信其ノ他ノ行政ヲ満洲國政府ニ移讓スベシ

第十條

滿洲國政府ハ前條ノ規定ニ依リ行政ノ移讓アリタル後ニ於テハ南滿洲鐵道附屬地ノ行政ヲ行フニ付一般文化ノ向上及產業ノ進展等ヲ阻害セザル様適當ナル措置ヲ講ズベキコトヲ約ス

第十一條

日本國政府ハ條約實施ト同時ニ滿洲國領域内ニ於テ日本國臣民ニ對シ警察其ノ他ノ行政ヲ行ハザルベク爾後日本國臣民ハ滿洲國ノ警察其ノ他ノ行政ヲ行フニ付日本國臣民ノ身體及財產ノ保護ニ關シ一切ノ保障ヲ與フベキコトヲ約ス

日本國政府ハ條約實施當時日本國當該官憲ニ於テ處理中ノ警察其ノ他ノ事件ハ書類ト共ニ原則トシテ之ヲ満洲國當該官憲ニ引繼グベシ

日本國政府ハ右學校組合及學校組合聯合會ノ成立ヲ承認スベシ

日本國政府ハ條約實施後日本國政府ガ滿洲國領域内ニ於テ日本國臣民ニ對スル徵集、服役、召集等兵事ニ關スル行政ヲ行フコトヲ承認スベシ

第四章 神社、教育及兵事ニ關スル行政

第十四條

滿洲國政府ハ條約實施後滿洲國領域内ニ於テ日本國又ハ其ノ臣民ガ日本國法令ニ依リ神社ヲ設置スルコト及日本國政府ガ其ノ神社ニ關スル行政ヲ行フコトヲ承認スベシ

第十五條

滿洲國政府ハ其ノ日本國臣民ニ對シ行フベキ教育行政ニ關シ重要ナル事項ニ付テハ當分ノ間豫メ満洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト満洲帝國國務總理大臣トノ間ニ協議決定セラル所ニ從ヒ約ス

第十六條

滿洲國政府ハ本章ノ規定ニ依ル日本國法令ノ適用ヲ援助スベク且之ガ爲日滿兩國當該官憲間ニ於テ協議決定セラル所ニ從ヒ必要ナル措置ヲ講ズベキコトヲ約ス

第五章 施設及職員ノ引繼

第十九條

滿洲國政府ハ治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附屬地ノ行政ノ管理ヲ爲サシムル爲満洲國領域内ニ於テ日本國法令ニ依リ公法人タル學校組合及學校組合聯合會ヲ設クルコトヲ得

八 滿州國をめぐる諸問題

日本國政府ハ前項ノ學校其ノ他ノ教育施設ノ開設、經營又ハ管理ヲ爲サシムル爲満洲國領域内ニ於テ日本國法令ニ依リ公法人タル學校組合及學校組合聯合會ヲ設クルコトヲ得

トシテ條約實施當時ノ狀態ニ於テ引繼グベシ

第六章 雜則

第二十條

滿洲國政府ハ條約實施前日本國當該官憲ガ日本國法令ニ依リ爲シタル認可、許可、免許等ノ行政處分ニ付滿洲國當該官憲ガ滿洲國法令ニ依リ爲シタルト同一ノ效力ヲ認ムベシ
滿洲國政府ハ前項ノ行政處分ニ付滿洲國法令ト日本國法令トノ間ニ其ノ條件ヲ異ニスル場合ニ於テハ一定ノ猶豫期間ヲ設ケ當該行政處分ヲ受ケタル者ヲシテ滿洲國法令ノ定ムル條件ニ依ラシムルコトヲ得ベシ

第二十一條

日本國政府ハ本協定ノ實施ニ必要ナル司法、警察、課稅、通信其ノ他ニ關スル記錄、登記簿、圖面、證書其ノ他ノ物件ヲ滿洲國政府ニ引渡スベシ

第二十二條

本協定ノ實施ニ關スル細目ハ必要ニ應シ滿洲帝國駐劄大臣本帝國特命全權大使ト滿洲帝國國務總理大臣トノ間ニ協議決定セラルベシ

第二十三條

本協定ハ條約ト同時ニ實施セラルベシ
右證據トシテ兩國全權委員ハ本協定ニ署名調印セリ
昭和十二年十一月五日即チ康德四年十一月五日新京ニ於テ之ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使 植田謙吉(印)

滿洲帝國國務總理大臣 張景惠(印)

滿洲國ニ於ケル治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附屬地行政權ノ移讓ニ關スル日本國滿洲國間條約及附屬協定(甲)ニ關スル日滿兩國全權委員間了解事項

第一 條約第三條及附屬協定第一條ニ付

一 日本國臣民ノ身分ニ關スル事項ニ付テハ滿洲國裁判所ハ日本國法令ニ準據スベキモノトス

二 滿洲國政府ハ條約實施當時日本國臣民ガ日本國法令又ハ慣行ニ依リ現ニ享受スル權利又ハ利益ノ保護ニ付必要ナル措置ヲ講ズベシ

第二 條約第四條ニ付

一 滿洲國政府ハ本條ノ規定ニ依リ法人ノ成立ヲ認ムルニ付テハ何等ノ手數料ヲ徵セザルベシ

二 滿洲國政府ハ本條ノ規定ニ依リ法人ノ成立ヲ認ムルモノニ付テハ其ノ現ニ享受スル輕減稅率ノ利益ヲ保護スベシ

第三 附屬協定第三條ニ付

一 本條第一項ノ規定ニ依リ處理セラルベキ事件ハ條約實施前日本國領事官ニ於テ取扱ヒタル事件及本條第一項ノ規定ニ依リ日本國領事官ノ取扱フ事件ニ關聯シテ生ズル爾後ノ手續ヲ包含スルモノトス

二 本條第一項ノ規定ニ依リ日本國領事官ノ行フベキ同様ニ處理セラルベキモノトス

第四 附屬協定第八條ニ付

滿洲國政府ハ日本國法令ニ依リ爲サレタル登記ニ付不動產上ノ權利ハ滿洲國法令ニ於ケル同種ノ權利又ハ最之ニ類似スル權利ト又商號及支配人ハ夫々滿洲國法令ニ於ケル商號及經理人ト看做スベシ

第五 附屬協定第九條ニ付

一 滿洲國政府ハ南滿洲鐵道附屬地居住民ノ福祉及利益ニ直接ノ影響アルベキ地方行政ニ付滿洲國地方官憲ガ

第七 附屬協定第十七條ニ付

本條ノ日本國司法官憲ハ當分ノ間日本國領事官トス

第八 附屬協定第十九條ニ付

調印ニ關スル廣田外務大臣談

(十一月五日)

滿洲國政府ハ本條ノ規定ニ依リ引繼ギタル關係施設ノ組織、職員ノ配置等ニ付事務ノ處理ヲ圓滑ナラシムル爲適切ナル措置ヲ講ズベシ

第九 附屬協定第二十條ニ付

滿洲國政府ハ日本國臣民ヲシテ條約實施前日本國當該官憲ヨリ發給ヲ受ケタル認可證、許可證、免許證等ノ書替ヲ受ケシムルコトヲ得ベシ但シ此ノ場合手數料ヲ徵セザルベシ

昭和十二年十一月五日即チ康德四年十一月五日新京ニ於テ之ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使 植田謙吉(印)

滿洲帝國國務總理大臣 張景惠(印)

編注 本條約の附屬協定(乙)は省略。

(付記一)

「滿洲國ニ於ケル治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附屬地行政權ノ移讓ニ關スル日本國滿洲國間條約」

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ依テ以テ世界平和ニ貢獻スルト共ニ國際正義ノ確立ニ依リ人類ノ福祉ヲ增進スルハ帝國ノ國是ニシテ特ニ滿洲國トノ特殊不可分的關係ヲ基調トシテ東亞ノ安定力タルノ實ヲ舉クルコトハ右國是ヲ遂行スル帝國外交ノ指導精神ナリトス。
我國カ滿洲國ニ於テ享有スル治外法權ノ撤廢及滿鐵附屬地行政權ノ移讓ハ盟邦滿洲國ノ健全ナル發達ノ爲ニハ勿論眞ニ兩國民ノ融和ヲ圖リ兩國善隣不可分ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ナラシムル上ニ於テ極メテ須要ノ事ニシテ之カ解決ニ關シテハ同國建國以來兩國政府ニ於テ至大ノ關心ヲ持シ來リタル所ナリ、歴史ヲ繙ケハ世界到ル處法權撤廢ノ難事業ヲ如實ニ示シ居ルニ拘ラス此ノ劃期的偉業カ極メテ短時日ヲ以テ實現ヲ見タルハ眞ニ慶祝ニ堪ヘサル所ナリ。

滿洲國ハ建國以來日尙淺キニ拘ラス其ノ理想タル五族ノ協和、日滿ノ融合ハ着々トシテ具現セラレ各般ノ制度施設ノ整備亦顯著ナルモノアリ今次條約締結ノコトアルハ蓋シ偶然ノコトニ非ス翻ツテ中華民國ノ現狀ヲ觀ルニ同國カ二十

有餘年ニ亘リ治外法權撤廢ヲ庶幾シ凡ユル手段ヲ講シタルニ拘ラス今尙舊態依然タルモノアリ加フルニ近時世界赤化ノ魔手ニ翻弄セラレ抗日ノ愚舉ヲ敢テス此ノ秋ニ當リ東洋平和ノ礎石タル日滿不可分關係強化ヲ具顯スル本條約ノ締結ヲ見ルハ眞ニ有意義ニシテ本大臣ノ欣快トスル所ナリ。

(付記三)

第一次條約締結ノ經緯

第一次條約ニ於テ帝國ハ行政警察權ヲ昭和十二年十二月末日迄ニ撤廢スヘキコトヲ豫約シタルカ領事裁判權ノ撤廢ニ關シテハ第一次條約樞密院會議ニ於テ右ハ準備完了ヲ俟チ且第一次條約實施ノ成績ヲモ徵シタル上撤廢スヘク其ノ時期ハ未タ豫定セサル旨説明セリ

然ルニ前記條約調印後現地側ハ現地ノ實情上兩者ノ同時撤廢ヲ主張シ來リタルカ外務省ハ前記樞密院會議ノ説明ニモ鑑ミ分離撤廢ヲ主張セルモ關係當局間ノ折衝ニヨリ現地側ノ意見ヲ容ルルコトニ政治的解決ヲ見十一年八月四日總理、外務、陸軍、司法及拓務大臣間ニ左記極祕覺書ノ調印ヲ見

タリ

- (イ)行政警察權及領事裁判權ハ明年(十二年)十二月末迄ニ同時ニ撤廢スルコトヲ政府ノ目標トシテ進行スルコト
(ロ)右ノ正式決定ハ明年(十二年)四、五月頃之ヲ爲スコト
(ハ)右ノ爲ノ準備トシテ法典ノ編纂、樞府工作等ニ關係各廳努力スルコト

右ニ對シ現地側ニ於テハ十二年四月頃撤廢ノ時機ヲ同年十月一日トスヘキコトヲ提議シ來リタルカ四月十日關係係官ノ協議ノ結果

- (イ)滿洲國ニ於ケル重要法規ハ現在(四月)未制定ニシテ六月末制定ヲ見ルモ單ナル公布ノミヲ以テシテハ樞密院ニ於ケル說明困難ナルコト
(ロ)十月一日案ハ條約案ノ作製關係當局法制局及樞密院等ノ審議ニ要スル時日ヲ考慮スルトキハ實現困難ナルコト等ノ理由ニヨリ現地案ニ反對シタル結果現地側ハ十月一日案ヲ撤回シ兩者間ノ折衝ニヨリ十一月一日ヲ期日トスルコトニ意見一致ヲミタリ

其後六月十八日閣議ニ於テ第二次條約締結ニ對シ大要左ノ如キ最高方針ノ決定ヲミタリ

稽へ行政警察權ト領事裁判權ヲ同時ニ撤廢シ

(回)條約實施期日ヲ十二月一日トシテ準備ヲナス

ハ殘務整理等過渡的事項及行政上、司法上ノ共助、施設、
職員ノ處理等ニ關シテハ適當措置シ神社、兵事、教育ニ
關シテハ一定ノ範圍内ニ於テ依然日本側之カ行政ヲ行フ

而シテ滿洲國側ニ於テハ銳意重要法規ノ制定、行刑施設ノ
整備等ニ努メタル結果我方ノ期待ニ背カサル程度ノ準備ヲ
完了セルヲ以テ愈々豫定通り十二月一日ヲ期シ治外法權及

附屬地行政權ヲ全面的ニ撤廢又ハ移讓スルコトナリ現地
案ヲ基礎トシテ條約案ヲ作成九月十五日對滿事務局參與事

務官會議ヲ經テ九月十七日右案ノ閣議決定ヲ見タリ據テ滿
洲國ニ諸リタル處同國ハ十月七日ノ國務院會議ニ於テ我方
原案ヲ承認セルヲ以テ樞密院ノ審查(審查委員會ハ十月八
日及十月二十日ノ二回本會議ハ十一月一日)ヲ經テ十一月

五日新京ニ於テ我カ特命全權大使植田謙吉、滿洲國國務總
理張景惠間ニ正式調印ヲ了セリ

オーストラリアに対する通商擁護法発動への
協力に際しての日滿関税問題に関する満州国

側要望について

別電 昭和十一年六月十九日発在満州國植田大使より
有田外務大臣宛第五五八号

右要望事項

新京 6月19日後発
本省 6月20日前着

第五五七號(至急、部外極秘)

貴電第四八九號ニ關シ(對濠通商擁護法發動ニ關スル件)
十九日關係者ノ打合會ヲ開キ星野財政部次長ヨリ東京ニ於
ケル事情ヲ聽取シタル上滿側ノ希望事項ニ付協議シタル結
果別電ノ趣旨ヲ當地軍側ヨリ陸軍省ニ電報シ陸軍省及對滿
事務局ヨリ外務省等ニ交渉スルコトナレリ

尚星野次長ノ說明ヨリ察スルニ陸軍省及對滿事務局側ニ於
テ本件ニ難色ヲ示シ居ルハ本件自體ニ對シ反對ナルニハア
ラスシテ客年對滿事務局ニ於テ審議中止トナレル日滿關稅
協定案ノ審議再開方ニ關シ此ノ際外務省其ノ他關係方面ノ
好意的考慮ヲ促サントスルニアルカ如ク又當地軍側及滿洲

1181 昭和11年6月19日 在満州國植田大使より

有田外務大臣宛(電報)

國側ニ於テモ所謂日滿經濟「ブロツク」ノ本質ニ關シ日本
側關係方面ニ於テ動モスレハ目前ノ利益及都合ノミニ捉ハ
レ滿側ノ立場ヲ沒却スル嫌ナキニアラストン此ノ機會ニ日
滿經濟「ブロツク」ノ本質ニ關シ日本側ノ一層ノ了解ヲ得
度シトノ希望アルニ付右御含蓄相煩度シ

(別電)

新京 6月19日後発
本省 6月20日前着

第五五八號(至急、部外極秘)

一、日滿「ブロツク」ノ結成ニ依リ國際通商戰ニ對處センカ
爲ニハ滿洲國ノ原料若ハ原料加工品ノ生産増殖政策ヲ確
立スルノ要アリ之力確立ノ一方策トシテ客年對滿事務局

ニ於テ協議ヲ續ケ審議中止ノ儘トナレル日滿關稅協定案
ヲ此ノ際再検討ヲ加フルト共ニ急速實施ニ移サンコトヲ
要求ス

鮮クモ同協定案ニ於ケル滿洲國要求事項ハ大局的見地ヨ
リ之ヲ容認スルノ具体的意思表示ヲ日本側ヨリ得度シ

二、當面ノ問題ニ關聯シ急速實現ヲ要望スル事項ハ左ノ如シ
要求ス

(イ)大豆油ノ關稅ヲ無稅トスルコト(濠洲ヨリノ輸入牛脂
代用品トシテ大豆油ノ關稅ヲ廢スルコトハ互惠關稅問
題トハ別個ノ問題トシテ必要ナリト認ム)
(ロ)大豆ノ關稅ヲ引下ケ輸入大豆ニ依ル大豆油製造ノ場合
ノ(脫?)全額免除主義ヲ動カササルコト及大豆粕ノ無
稅存續(イ)ト同趣旨ナルモ原料大豆ノ供給ヲ確保スル
ノ意圖ニ出ス)
(ハ)牛肉ノ關稅ヲ減稅又ハ無稅トスルコト(濠洲品トノ對
抗關係ニアル品目ナルニ付此ノ際滿洲牛ヲ以テ濠洲牛
ニ代替セシムルノ措置トシテ特惠的待遇ヲ要望スルモ
ノナリ)

以上何レモ恒久的ノモノトシテ對濠報復解消後ト雖變更
セサルコトヲ要ス

三、尙對濠問題ニ關シ曩ニ申入レタル要望事項ハ此ノ際日本
側關係者ノ充分ナル了解ヲ得置キ度シ
四、滿洲國ニ於ケル小麥、小麥粉及羊毛ノ自給自足ニ付日本
側ノ容認及援助ヲ得度シ

五、關東州ニ付テモ同時ニ實施セラルヘキコト

治外法権撤廃に伴う在満領事館の廢止問題を
めぐる報道が満州国各方面の注意を喚起して
いる状況につき報告

付記 東亜局作成、「昭和十一年度執務報告 第一

冊(第二課及第三課關係)(昭和十一年十一月)

より抜粋

治外法権撤廃に伴う在満機構調整について

新 京 7月14日後発
本 省 7月14日夜着

第六五六號(極秘級)

守屋ヨリ

十三日貴地發國通ハ「治外法権撤廃ニ伴フ在満領事館廢止問題カ各方面ニ傳ヘラレ」居ル旨ノ書出ノ下ニ右ニ關スル外務省當局談トシテ外務大臣ノ官制上ノ責任ヲ述ヘタル後満洲國ノ情勢ニ鑑ミ有田大臣トシテハ寧ロ領事館ノ増設ヲコソ企圖サレ撤廢等ハ少シモ考慮シ居ラレス現ニ來年度ノ豫算ニ於テモ在(満)領事館増設上適當ナル經費ノ計上ヲ爲

シアル旨ヲ報シ居リ各方面ニ多大ノ注意ヲ喚起シタルヤニ認メラル尙關東局係官ハ本官ニ對シ在満機構改正問題ニ付テハ先般上京中關係各機關ニ於テ當分極秘ニ附スルコトニ了解成リタルニ拘ラスル當局談ノ發表サレタルハ不可解ナリトテ不滿ノ口吻ヲ洩ラン居リタリ

(付記)

治外法権撤廃ニ伴フ在満機構調整ニ關スル件

一、満洲國ニ於ケル治外法権ノ撤廢及附屬地行政権ノ移讓完了ヲ楔機トシ關東局ノ改組、大使館機構ノ改正及在満領事館ノ配置分合等ノ問題起ルベキハ當然ノ次第ナル處在満大使館ニ於テハ之ガ對策ニ付早目ニ考究シ置クノ要アリトシ昭和十一年四月大使館作成ニ係ル一案ヲ送附シ越セルガ本省ニ於テモ之ト並行シ東亞三課北澤事務官ニ於テ陸軍省係官片倉少佐ト内々聯絡シ、陸軍中央側ノ意向ヲ探ルト共ニ之ガ指導方ニ付努力シ來レリ

二、其ノ後現地關東軍側ニ於ケル本件處理方針ハ漸次具體化セルモノノ如ク七月十四日ニハ軍參謀長ヨリ大使館參事官ニ對シ現地案作成ノ爲大使館側ノ意向ヲ承知シ度キ旨

(略会)紹介越セル次第アリ、其ノ後モ引續キ之ヲ督促シ越セルガ本省ニ於テハ本件ハ甚ダ機微ナル關係モアリ外務出先機關ニ於テ具體的ニ瓦ル意見ヲ提示スル場合ニハ現地ニ於テ「デッドロック」ニ陥リ中央ニ於テモ收拾スペカラザル事態ヲ惹起スル虞アリト認メ中央ニ於ケル政治的折衝ニヨリ之ガ解決ヲ圖ルノ方針ヲ持シ出先官憲トシテハ軍側ニ對シ「本件ニ付テハ大使館トシテ未ダ充分ニ研究ヲ盡スニ至ラザル次第ナルガ外務本省ニ於テハ目下折角研究中ノコトニモアリ大使館トシテ研究未熟ノ案ヲ御示シスルモ如何ト思考セラレ旁々本件ニ付テハ大使館側ニ御構ヒナク軍トシテ意見ヲ中央ニ上申セラルル様致度」トノ趣旨ニテ可然應酬スルコトニ方針ヲ決定セリ

尙本件ト關聯シ七月十三日夕刊紙上(時事、日々、國民)ニ在満領事館廢止説掲載セラレタルニ對シ同日夕天羽情報部長ノ記者團會談ニ於テ「本件記事ハ外務省ノ方針ニ全然反對ナリ其ノ理由ハ外務大臣ハ官制上外國ニ於ケル帝國商事ノ保護ト在留邦人ノ保護ニ當ル責任ヲ有ス從テ其ノ責任ヲ遂行スベキ手足タル領事館ヲ廢止スルガ如キコトハ考慮スルコトヲ得ズ殊ニ満洲國々境地方ニ於テ

蘇聯其他外國側トノ交渉多ク領事館ノ廢止ハ愚カ增設ヲ必要トスルモノニシテ明年度豫算ニモ増設方ヲ要求スル豫定ナリ云々」ノ談話ヲ發表セルガ右談話ハ十三日ノ「ラジオ」ニテ放送セラレ次デ國通ニ依リ全滿各地ニ報道セラレタル結果各方面ノ注意ヲ喚起シ本件處理方ニ付相當ノ影響ヲ與ヘタルモノノ如シ

三、前記方針ニ則リ外務省トシテノ本件取扱ハ專ラ本省ニ於テ之ニ當リ出先機關トシテハ唯(?)在満機構ニ付テハ治外法權及附屬地行政權移讓ノ後ニ於テモ昭和九年九月十四日閣議決定ノ趣旨即在満機關ノ命令系統及權限ノ範圍ヲ變更スルコトナク治外法權及附屬地行政權移讓ニ伴フ在満機關ノ事務ノ縮少ニ對應シ適宜調整スベキコト(?)法權撤廢及行政權移讓ノ根本精神ハ満洲國ノ健全ナル發達ニ對スル障礙ヲ除去スルニ在リ、從テ日本側ノ内務行政の施設ハ可成之ヲ少クシテ満洲國側ノ内務行政ニ委スルヲ必要トスル次第ナルニ付右根本方針ニ背馳シテ日本側ノ内務行政の施設ヲ擴大強化スルガ如キハ絕對ニ避ケルヲ要スルコト等ヲ關東軍側ニ吹込ム様措置セルニ止マリタル處、軍側ニ於テハ漸次本件調整要綱案ヲ具體化シ八月

十九日ニハ關東軍參謀長ヨリ大使館參事官及關東局總長

ニ對シ別紙第一號ノ如キ八月五日附軍務局案ヲ中間報告トシテ内示スル所アリ右ニ對シ參事官ハ唯説明ヲ聞キ置ク程度ニシテ輕ク應酬シ置キタルガ、關東局側ニ於テハ相當強キ不満ヲ存シタルモノノ如ク、研究ノ上意見ヲ申出ヅベキ旨留保セリ

四、右軍務局案ハ全體ヲ通ジ急激ナル變更ヲ避ケルコトニ留意シアリ比較的穩健ナルモノト認メラレタル處、前記關東局側ノ不満アリ之ニ基ク關東局側ノ策動ハ相當熾烈ナルモノアリタルガ如ク更ニ從來トモ存セル關東軍内ノ在滿領事館廢止論ハ右關東局側ノ運動トモ照應シ十月七日關東軍案トシテ大使館參事官ニ提示セラレタルモノハ別紙第一號ノ通、在滿領事館ノ廢止ヲ原則トシ居ル等在滿機構ニ對シ急激ナル變化ヲ與フルモノトナリタリ、本案ハ單ニ關東軍案タルニ止マリ現地ニ於テモ大使館側及關東局側ノ同意ヲ經居ルモノニ非ズ、又中央軍側ニ於テモ之ヲ全部的ニ支持シ居リタルモノニハ非ザルモ實際上ハ特命全權大使ヲ兼ヌル關東軍司令官ノ承認ヲ得タル案トシテ結局現地案タルガ如キ實質ヲ具ヘ、中央ニ於ケル本

件審議ノ原案タルニ至レリ

五、右關東軍案ニ對シテハ別紙第三號ノ通外務省ノ意見ヲ決定シ、陸軍側ト連絡スルト共ニ十月二十八日以來對滿事務局ニ於テ行ハレタル本件審議ニ際シテハ右趣旨ニ則レル外務省修正案(別紙第四號)ヲ提出シ之ガ貫徹ニ努メタルガ直接滿洲國ニ乗出スガ如キ案ヲ提示シ來リ陸軍側ニ於テ妥協案ヲ提出スル等數回ニ亘リ會議ヲ開キタルモ結局意見ノ一致ヲ見ズ將來政治的解決ニ委スル場合ヲ豫想シテ内閣方面ニ對シテモ各方面ノ主張ヲ詳悉セシムル要アリトシ十一月十八日ニハ権員法制局參事官、三橋内閣書記官等ヲ加へ懇談シタル結果翌十九日ノ會議ニ於テ権員參事官ヨリ一私案ノ提示アリタルガ、其ノ主要點ニ於テハ到底外務省側ニ於テ容認シ得ザリシ教育部長ニ資スル所ナク加之從來問題トナリ居ラザリシ教育部長ノ問題ヲ提示スル等多分ニ關東局側ノ策動ニ依ルモノトノ疑惑ヲ深カラシメタルニ過ギザル結果トナリタリ

六、從來ノ會議ニ於テ最モ問題トナリタル事項中領事館問題ニ付テハ之ガ存置ヲ貫徹スルコト必ラズシモ困難ニ非ズ

ト認メラレタルモ教育及神社行政ノ問題ニ付テハ結局外務省ニ於テモ或ル程度ノ讓歩ヲ爲ス外解決ノ途ナシト認メ、結局

(1)關東軍案中最高機關ノ二位一體制、在滿領事館問題及

關東局改組問題ハ事外務省、陸軍省及對滿事務局三廳

間ノ問題ナルニヨリ之ヲ切離シテ一ノ覺書トスルコト

トシ、十二月二十八日別紙第五號ノ通決定ヲ見タルガ

(2)兵事行政ニ關シテモ些シテ問題ナク一月二十三日對滿

事務局一部事務官會議ニ於テ別紙第六號ノ通決定セリ

(日本側ニ於テ行フ兵事事務處理要項ニ付テハ二月一日決定)

(3)最モ問題トナリタル教育及神社行政ニ關スル件ハ外務、

對滿事務局間ニ種々論議ヲ重ねタル結果十二月二十八

日外務省、對滿事務局、陸軍省係官ノ間ニ意見ノ一致

ヲ見タルモ其ノ後内務省、朝鮮總督府方面ヨリ少許ノ

修正意見出デ結局本年二月一日別紙第七號ノ通關係廳

廳ノ意嚮纏りタル處、大藏省ノミハ其ノ全部ニ付贊否

ヲ留保シ居レリ、尙前記客年十二月二十八日關係廳

官決定ノ際別紙第八號ノ如キ議事錄ヲ添付シ以テ將來

第一號
一、關東局
附屬地行政權移讓後ノ事務ノ減少ニ伴ヒ之ヲ縮少整理ス例ヘバ警務部ヲ廢止シ司政部ヲ縮少シ要スレバ監理部ヲ増強スルガ如シ

關東州廳ハ現在ノ儘トスルモ民政署ハ成ルベク之ヲ廢止ス

二、大使館

警務部ヲ廢止シ特ニ領事ニ對スル指揮監督ヲ強化スル様措置ス

三、領事館

管掌事務ニ應ジ其ノ內容ヲ整理シ事務ヲ簡易化ス

四、移民事務ノ取扱

當分現在通リトス

三、拓殖事務ノ指導獎勵ニ關スル事務

當分現在通リトス

六、兵事事務ノ取扱

在滿日本人ニシテ本邦戸籍法ノ適用ヲ受クル者ニ對スル服役徵集(志願ニ依リ兵籍ニ編入セラル者ノ召募ヲ含ム)及召集等ニ關スル兵事事務ハ原則トシテ軍ニ於テ處理ス(帝國地方側機關ヲ利用スル必要アル場合ニハ領事館ノ系統ニ於テ之ヲ行フ)

尙滿洲國ヲシテ所要ニ應ジ右事務執行ヲ援助セシムル爲協定其ノ他ニ依リ適當ナル措置ヲ講ズ

七、教育及神社事務ノ取扱

日本側ニ暫時保留スル教育經營團體及學校ノ監督指導、教員ノ任免等並ニ神社ニ關スル事務ニ關シテハ大使館ニ一部局ヲ設ケ其ノ主要職員ニハ關東局竝ニ文教關係適任者ヲ兼任又ハ專任トシテ重用シ得ル様措置ス

地方機關ノ設置ハ之ヲ避ク

註、保留教育行政ノ「教員ノ任免」、「在外指定學校ノ措置」、「學校經營ノ爲居留民ニ學校組合ノ組織」等ヨリ形式上大使系統トシ内容上ニ於テ

ハ適任者ヲ充當スルコト便益ナルニ依ル

第一號

一、最高機關ノ二位一體制及大使ト中央トノ關係ハ現制ノ通トス但シ現地諸機關ノ豫算人事等ヲ完全ニ大使ニ於テ掌握スル如ク其ノ權限ヲ確立ス

二、在滿領事館ハ領事館本然ノ職務ト日滿一體ノ特殊關係トニ鑑ミ之ヲ他ノ樞要地方ニ移ス如ク處理ス

國境紛爭處理其ノ他對外地方的問題處理等ノ爲ニハ樞要ノ地ニ大使館員派出所ヲ設置シ所要ノ職員ヲ駐在セシム其ノ數ハ概六、七箇所ト豫定ス

三、關東局ハ附屬地行政權ノ移讓ニ伴フ改變ヲ加ヘ關東州ニ於ケル政務ノ監理竝ニ滿鐵及電々會社ノ業務ノ監督ニ關スル事務ヲ管掌ス

四、滿洲國內ニ於ケル日本人ノ教育及神社ニ關スル行政ニ付テハ大使館ニ所要ノ文教關係適任者ヲ配置シ地方機關ハ原則トシテ之ヲ設置セズ滿洲國日人地方官等ノ補助ニ依リ之ヲ處理ス而シテ本行政ノ爲大使館ニ配置スル職員ハ關東州ニ於ケル行政トノ聯絡ヲ顧慮シ主トシテ關東局ノ

文教關係職員ヲシテ兼任セシムル様措置ス

五、滿洲國內ニ於ケル日本人ノ徵募召集等ノ兵事事務ハ軍ノ系統ニ於テ滿洲國日人地方官及警察官ノ補助ニ依リ之ヲ處理ス

第三號

關東軍參謀部案ニ對スル意見

一、現地諸機關ノ豫算、人事ヲ完全ニ大使ニ掌握セシムルコトハ關東局ヲ除キテハ不可能ナリ、現ニ在滿軍事機關ニ於テモ司令官ニ於テ豫算、人事ヲ完全ニ掌握シ居ルニアラズ、最終的ニハ陸軍大臣ニ於テ決定スルナリ、外務省トシテモ在滿外務省機關ノ豫算、人事ハ最終的ニハ外務大臣ニ於テ決定スベキコト勿論ナリ尤モ一應大使ニ於テ之ヲ統轄セシムルコトハ已ムヲ得ザルベシ

一、在滿領事館ヲ廢シ大使館出張所ヲ設置スルコトニハ絶対反對ナリ。外務大臣ハ官制上滿洲ニ於ケル帝國居留民ノ保護ニ關スル職責ヲ有シ從テ其ノ職責執行ノ機關タル領事館ヲ廢スルコトヲ得ザルノミナラズ事實問題トシテ領事ハ在留民ト滿洲國日系官吏又ハ軍トノ間ノ緩和機關ト

一、教育行政ニ付原則トシテ地方機關ヲ置カズ日系官吏ノ補助ニ依リ之ヲ處理セントスル案モ反對ナリ、日系官吏ニ

委任スル位ナラ教育行政ハ滿側ニ移讓スルコト可然若シ
教育行政ヲ日本ニ留保スルコトトスルナラバ原則トシテ
日本側機關ニ於テ行フコト必要ニシテ其ノ場合ニハ地方
機關モ必要ナリ

一、滿洲ニ於ケル教育行政ニ關シ關東州ニ於ケル夫トノ連絡
ノ爲主トシテ關東局員ヲシテ大使館ノ教育關係職員ヲ兼
任セシムルコトハ意味ナシ、滿洲ニ於ケル教育ニ付テハ
寧口内地トノ連絡ヲ必要トス又右兼任制度ハ南滿ニ於ケ
ル關東局警察官ノ領事館警察官兼任制度ニ關スル苦キ經
驗ニ鑑ミ將來ニ癌ヲ殘スモノナリ仍テ文部省、關東局ノ
専門家ヲ專任外務省員ニ採用シ之ヲシテ大使館等ノ教育
事務ヲ掌ラシムルコト適當ナリ、尤モ二、三關東局員ヲ

シテ大使館教育職員ヲ兼任セシムルコトハ差支ナカルベ
シ

一、關東局ニ於テハ滿洲ニ於ケル教育行政ヲ關東局ニ於テ掌
理スルコトヲ主張シ居ル處教育行政ハ日本ニ留保スルコ
トトスルモ當分ノ間日本側ニ留保シ、行ク行クハ滿側ニ
移讓スルモノニ拘ラズ關東局ヲシテ之ニ當ラシムル場合
ニハ實際問題トシテ滿側ヘノ移讓ヲ困難ナラシムル虞多

任スルコトヲ得ス(現ニ内地ニ於テモ内務省、府縣市町
村之ニ參加シ居レリ)若シ兵事事務ヲ日本側ニ於テ處理
スルコトセバ軍ノミナラズ居留民保護ノ任ニアル外務
省機關モ之ニ參加スルコトヲ要シ若シ兵事ニ關シ外務省
機關ニ於テ爲ス部分ヲ日系官吏ニ委任シテ可ナリト云フ
ナラバ軍ノ爲スペキ部分モ滿側ニ委任スペキナリ

第四號

在滿機構改革ニ關スル關東軍案ニ對スル
外務省修止案

一、最高機關ノ二位一體制及大使ト中央トノ關係ハ現制ノ通
トス但シ現地外務省諸機關ノ豫算人事等ハ大使館ヲ經由
スル如ク適當ノ措置ヲ講ズルモノトス

二、在滿領事館ハ治外法權撤廢後ニ於テモ之ヲ存置スルモノ
トス但シ日滿一體ノ特殊關係ニ鑑ミ在滿領事館ノ職務ニ

付テハ成ルベク滿洲國日系官吏ヲシテ之ヲ補助セシムル
コトトスベク從テ在滿領事館ハ國境紛爭處理其他對外地
方的問題處理等ノ爲日本側ト第三國側トノ交渉アル地方
ヲ除キ其ノ取扱フ事務ノ性質分量現地ノ事情等ヲ考慮シ
漸次配置換其他整理ヲ行フモノトス

三、關東局ハ附屬地行政權ノ移讓ニ伴フ改變ヲ加ヘ關東州ニ
於ケル政務ノ管理竝ニ滿鐵及電々會社ノ業務ノ監督ニ關
スル事務ヲ管掌セシムルモノトシ又關東局特別會計ハ之
ヲ廢止スルモノトス

四、滿洲國內ニ於ケル日本人ノ教育及神社ニ關スル行政ガ日
本側ニ留保セラル場合ニハ右行政ニ付テハ在滿大使館
(關東局ヲ含マズ)ニ文教關係適任者ヲ配置シテ之ヲ掌ラ
シメ地方機關ハ大使館ノ指揮監督ノ下ニ領事館ヲシテ之
ニ當ラシムルモノトス尤モ右行政ニ付テモ成ルベク滿洲
國日系官吏ヲシテ補助セシムルコト勿論トス右行政ノ爲
大使館ニ配置スル職員ハ原則トシテ專任ノ大使館職員タ
ル身分ヲ保持セシメ必要ニ應ジ關東局及朝鮮總督府ノ文
教關係職員ヲシテ兼任セシムルモノトス

五、滿洲國內ニ於ケル日本人ノ徵募召集等ノ兵事事務ハ領事
教關係職員ヲシテ兼任セシムルモノトス

分ニ存シ又滿洲ニ於ケル癌タル關東局特別會計ヲ廢止ス
ルコトヲ益々困難ナラシムベシ。大藏省側ニ於テモ教育
行政ヲ關東局ヲシテ爲サンムルコトニハ強キ反對アル由
一、兵事事務モ居留民ニ關スル事務ノ一部ニシテ全部軍ニ委
任スルコトヲ得ス(現ニ内地ニ於テモ内務省、府縣市町
村之ニ參加シ居レリ)若シ兵事事務ヲ日本側ニ於テ處理
スルコトセバ軍ノミナラズ居留民保護ノ任ニアル外務
省機關モ之ニ參加スルコトヲ要シ若シ兵事ニ關シ外務省
機關ニ於テ爲ス部分ヲ日系官吏ニ委任シテ可ナリト云フ
ナラバ軍ノ爲スペキ部分モ滿側ニ委任スペキナリ

第六號

兵事行政ニ關スル處理要綱

(昭和一二一、一、二三一部事務官會議決定)

滿洲國內ニ於ケル日本人ニシテ本邦戸籍法ノ適用ヲ受クル

者ニ對スル服役、徵集(志願ニ依リ兵籍ニ編入セラル者

ノ召募ヲ含ム)召集等ニ關スル兵事行政ハ治外法權撤廢竝

附屬地行政權移讓後ト雖モ日本側ニ於テ之ヲ行フモノトス

滿洲國ハ右兵事行政ノ執行ヲ援助スル爲適當ナル措置ヲ講

ズルモノトス

右ニ關シ必要ナル條約又ハ協定ヲ締結スルモノトス

備考

入營者職業保障法ハ附屬地行政權移讓ノ際附屬

地内ノ適用ヲ廢止セラルベキニ付滿洲國ハ入營

者ノ職業保障ニ關シ同法ノ精神ニ合スル如キ適

當ナル措置ヲ講ズルモノトス

日本側ニ於テ行フ兵事事務處理要領

(昭和一二一、一、二三一部事務官會議決定)

日本側ニ於テ行ハルベキ兵事事務ハ原則トシテ陸海軍ニ於テ處理スルモノトス但シ他ノ行政機關ノ負擔スベキ事務ニ關シテハ外務系統ニ於テ主トシテ滿洲國行政機關ノ補助ニ依リ之ヲ行フ

兵事事務ニ關スル罰則ノ適用ニシテ司法手續ニ依ルベキモノノ管轄裁判所及滿洲國ノ共助ヲ要スル事項ニ付テハ別ニ之ヲ定ム

第七號

神社行政、教育行政ニ關スル件

(昭和一二一、一、二一部事務官會議修正)

一、滿洲國內ニ於ケル神社及日本人教育ニ關スル行政ニ付テハ大使館ニ教務部(假稱)ヲ置キ大使統轄ノ下ニ之ヲ處理

セシメ地方機關ハ原則トシテ之ヲ設置セズ滿洲國日人地方官等ノ補助ニ依リ之ヲ行フモノトス

二、大使館教務部ニ專任及兼任教務官(假稱)ヲ置ク

專任教務官ハ外務省、關東局、文部省等ノ文教關係職員中ヨリ之ヲ任用スルモノトス

兼任教務官ハ關東州(及朝鮮)ニ於ケル神社及教育行政ト

ノ聯絡ヲ顧慮スル必要上關東局(及朝鮮總督府)ノ文教關係

係職員ヨリ兼任セシム專任教務官ハ必要アル場合關東局

文教關係職員ヲ兼任シ得ルモノトス教務部ニ專任及兼任

ノ視學官、教務書記、視學等ヲ置キ主トシテ外務省、關

東局、文部省、朝鮮總督府、滿鐵等ヨリ適任者ヲ充當ス

ルモノトス

三、教務部職員トシテノ任免其ノ他ノ身分關係(兼任職員ニ付テハ兼任トシテノ身分關係)ハ外務大臣ノ系統ニ屬ス

四、教務部ノ事務ノ內容ニ關シテハ內閣總理大臣(對滿事務

局)及外務大臣ノ一大臣大使ヲ通ジテ之ヲ共管ス

關係各廳間ノ連絡統一ニ付テハ對滿事務局中心トナリテ之ニ當ルモノトス

五、教務官以下職員ノ設置及員數(專任、兼任トモ)等ニ付テハ單行勅令ヲ以テ之ヲ規定ス

六、教務部ニ關スル豫算ハ外務省所管トス但シ兼任職員ノ俸給等ノ豫算ハ各本官所屬廳ノ所管トス

在滿洲國學校等ニ對スル補助金豫算ハ大藏省(內閣)所管

トス

但シ朝鮮人學校ニ對スル補助金豫算ハ朝鮮總督府特別會

第八號

「教育行政、神社行政ニ關スル件」ニ關スル

關係各廳懇談會議事錄摘要

(昭和一一、一二、二八於對滿事務局)

對滿 對滿事務局、外務省及陸軍省間ニ纏リタル案ニ於テ

ハ第一號中「教務部」ノ前ニ「官制ニ依ラザル」ト

イフ字句アリタルモ斯ク定ムルコトハ内閣官房總務

課及法制局ニ於テ反対アリタルニ付此ノ際削除セリ

外務 第五號ノ教務官等ノ設置等ニ付テハ單行勅令ヲ以テ

規定ストノ點ニ付テハ法制局ニ於ケル勅令案ノ審議

ノ際單行ノ形式トスルコトニ付再考スルコトヲ妨げ

ザル儀ト諒承アリ度シ

一同 異議ナシ

對滿 備考一ノ「略々同數」トハ備考一ノ教務部長タル教

務官ヲ除キ専任、兼任同數トスルノ趣旨ト致シ度シ

一同 異議ナシ

外務 教務部判任官ニ付テハ兼任者ヲ専任者ヨリモ少數ト

スルモノト解シ支障ナキヤ

對滿 適當減少スルハ支障ナシ、右ニ基キ具體的ニハ現地

當局ノ研究協議ニ任ズルコトト致シ度シ

一同 異議ナシ

對滿 教務部ノ事務及職員ハ大使館參事官トハ別個ノ系統

本省 8月17日後6時10分発

第四九號

滿洲國ハ自國產業保護ノ目的ヲ以テ十五日貿易緊急統制法

ヲ公布即日實施セリ右ニ基ク同日附敕令ヲ以テ小麥、小麥

粉、羊毛及米ニ對スル輸入許可制ヲ適用スルコトセセルガ

濠洲品ニハ事實上輸入禁止ヲ爲ス意図ナリ尙右敕令ハ我對

濠措置ニ協力スルノ意味ヲモ有ス

1183 昭和11年8月17日 有田外務大臣より
在シドニー村井(倉松)総領事宛(電報)

滿州国においてオーストラリア産小麦等に對する輸入許可制を実施について

同一 異議ナシ

第四九號

滿洲國ハ自國產業保護ノ目的ヲ以テ十五日貿易緊急統制法

ヲ公布即日實施セリ右ニ基ク同日附敕令ヲ以テ小麥、小麥

粉、羊毛及米ニ對スル輸入許可制ヲ適用スルコトセセルガ

濠洲品ニハ事實上輸入禁止ヲ爲ス意図ナリ尙右敕令ハ我對

濠措置ニ協力スルノ意味ヲモ有ス

1184 昭和11年8月27日 在チチハル内田(五郎)領事より
有田外務大臣宛

同一 異議ナシ

第四九號

滿洲國ハ自國產業保護ノ目的ヲ以テ十五日貿易緊急統制法

ヲ公布即日實施セリ右ニ基ク同日附敕令ヲ以テ小麥、小麥

粉、羊毛及米ニ對スル輸入許可制ヲ適用スルコトセセルガ

濠洲品ニハ事實上輸入禁止ヲ爲ス意図ナリ尙右敕令ハ我對

濠措置ニ協力スルノ意味ヲモ有ス

1570

ナルハ勿論ナリト了解シ度シ

外務 別個ノ系統ナルハ勿論ナルモ兩者間ノ所要ノ連絡ハ

圓滑ニ行ハルル様致シ度シ

同一 異議ナシ

。。。。。。。。。。。。。。。。。

本件ニ關シ牒知シタル處ニ依レハ豫テ關東軍、關東局、滿洲國金融統制計畫ニ關スル件

在滿洲國

特命全權大使 植田 謙吉殿

滿洲國金融統制計畫ニ關スル件

本件ニ關シ牒知(釋文)

(本館署長報告)

機密第六四四號 昭和十一年八月二十七日在齊々哈爾

領事 内田 五郎

四三井、三菱兩銀行ノ滿洲進出ハ之ヲ許可セサルコト
五、横濱正金銀行ヲ以テ滿洲國爲替銀行トナス

六、中銀其他ノ滿洲國內銀行ノ利率ハ日本政府ノ政策ニ順應

セシム

右何等御参考迄報告申進ス

本信寫送付先、外務大臣、在滿各公館長、管下一般

1571

大使館警務部長

昭和11年9月8日 在満州国植田大使より
有田外務大臣宛

満州国における通貨統一措置などにより必要性を喪失した横浜正金銀行発行の鈔票整理方

針を関東局内示について

公機密第一五三一號

(9月14日接受)

昭和十一年九月八日

(別紙)
満洲ニ於ケル鈔票處理要綱
第一、方針

特命全權大使 植田 謙吉〔印〕

外務大臣 有田 八郎殿

満洲ニ於ケル鈔票整理ニ關スル件
横濱正金銀行ノ發行スル鈔票ハ從來主トシテ對支爲替取引及特產取引ノ通貨トシテ重要ナル機能ヲ發揮シ來リタルモ近時満洲ニ於テハ通貨ノ統一、國幣ノ金圓ニ對スル等價維持、中華民國ノ幣制改革等ニ依リ漸ク其ノ必要性ヲ喪失シ來リタルノミナラス通貨統制上及特產取引上却テ支障多キヲ加ヘツツアル現狀ニ鑑ミ金圓ニ對シ等價ヲ維持シツツア

ル此ノ際本件鈔票ノ發行ヲ廢止スルト共ニ一定ノ相場ヲ以テ邦貨ト引換ヘシメ可及的速ニ之力整理ヲ計ルコトトシ今般關東局ヨリ對滿事務局ニ右ノ趣旨ニテ稟請スルコトトナリタル趣ヲ以テ別紙要綱關東局側ヨリ當館係官ニ内示シ越セルニ付右何等御参考迄茲ニ送付申進ス

満洲ニ於ケル鈔票ノ流通ハ近時漸ク其ノ必要性ヲ喪ヒ來リタルノミナラス特產取引上及通貨統制上却テ支障多キヲ加ヘツツアル實情ニ鑑ミ適當ノ時期ニ於テ之カ發行ヲ禁止スルト共ニ一定ノ相場ヲ以テ邦貨ト引換ヘシメ可及的速ニ之力整理ヲ計ルコト尤モ之カ關係業務者及財界ニ與フルコトアルヘキ惡影響ヲ能フ限り緩和スル様考慮スルモノトス

第二、實行方法

一、準備

(1) 正金銀行ト協議シ最近ニ於ケル大連取引所錢鈔市

場ノ相場ヲ參酌シテ鈔票對邦貨引換相場ヲ内定シ

該相場維持ニ努メシムルコト

(2) 必要ナル期間市場相場ヲ可及的右引換相場ニ安定

セシムル爲左ノ方策ヲ講スルコト

イ、取引所ヲシテ情勢ニ應シ鈔票相場ノ騰落ヲ阻止スル處置ヲ執ラシムルコト

ロ、爲替管理ヲ徹底シ鈔票ノ思惑賣買及鈔票建對外爲替(特ニ滙申)ノ取締ヲ一増嚴ニスルコト

ト

備考

右勅令ハ實施前十日内外ニ公布スルコト

(2) 發行禁止ト同時ニ大連及新京ニ於ケル取引所特產

市場ノ銀建制ヲ廢止シ錢鈔市場ハ之ヲ閉鎖スルコト

第三、善後處置

一、鈔票ノ引換實施ト共ニ關東州及南滿洲鐵道附屬地ニ

於ケル外國爲替管理ニ適當ナル調整ヲ加ヘ必要ニヨリテハ更ニ法令ノ改正ヲ行フコト

(1) 相當ノ救濟金交付ニ付考慮スルコト

(2) 錢鈔取引人中適當ト認ムル者ニ對シ特產取引人又ハ五品取引人ノ免許ヲ與フルコト

ロ、正金銀行ヲシテ所持者ノ要求ニ應シ一定ノ期

イ、一定ノ期日(昭和十一年十月一日ト豫定ス)以後一定ノ相

後發行ヲ禁止スルコト

ハ、鈔票ヲ以テ表示スル債務ハ一定ノ期日(昭和

十一年十月一日ト豫定ス)以後前號ノ相場ニ依ルコト

ハ、鈔票ヲ以テ表示スル債務ハ一定ノ期日(昭和

十一年十月一日ト豫定ス)以後前號ノ相場ニ依

編注 昭和十一年九月二十一日、横浜正金銀行券發行廢止等

に關する満州國勅令が公布され、同年十月一日より施

行された。

1186 昭和11年9月21日 在満州国植田大使より

有田外務大臣宛(電報)

満州国商租権整理法の邦人への適用を承認した旨報告

新 京 9月21日後発
本 省 9月21日夜着第八八一號
本使發在滿各領事宛電報

合第六三五號

六月十日ノ日滿間條約附屬協定第一條實施ノ爲本二十一日
公布セラレタル滿洲國商租権整理法ヲ日本國臣民ニ對シ適用
スルコトニ承認ヲ與ヘ置キタルニ付御了知相成度シ
尙日本人ノ同法違反ニ對スル處罰ニ關シテハ領事館令ヲ以
テ規定スルコトトシ且下本省ニ對シ案文請訓中ニ付決定次
第更メテ申進スヘシ

大臣へ轉電セリ

1187 昭和11年12月11日 在満州国植田大使より

満州国の小麦等に対する輸入制限措置の緩和
方につきオーストラリア側要望について

本 省 12月11日後5時45分発

第九六一號
往電第九五三號ニ關シ九日着村井總領事來電(會商第三二四號)ニ依レバ
其後濠洲側ハ製粉業者等カ本問題ヲ重要視シ居ル關係上政
府トシテハ有耶無耶ノ儘ニシテ通商關係回復ヲ爲シ難キ立
場ニアリ日本政府ヨリ満洲國側ニ對シ好意的斡旋アリ度旨
並満洲國力其國策上小麥許可制ヲ必要トセラル場合ニハ
之ニ異議ヲ唱ヘサルモ其ノ場合ニハ現在ノ如キ差別的制限
令ヲ廢シ無差別ノモノトセラレンコトヲ欲スル旨申出テ來
レリ1188 昭和11年12月12日 在新京中野總領事代理より
有田外務大臣宛

民族別部門制の不採用など治外法権撤廃に伴記

う満州国商工會議所法の立案に関する実業部

方針につき報告

公機密第六六五號

昭和十一年十二月十二日

(12月21日接受)

在京

總領事代理 中野 高一 [印]

外務大臣 有田 八郎殿

昭和十一年十二月十二日附機密第一〇四一號在滿大使宛寫
送付

件 名

一、満洲國ノ會議所法令ニ關スル件

機密第一〇四一號

昭和十一年十二月十二日

在京

總領事(代理) 中野 高一

在満洲國

特命全權大使 植田 謙吉殿

満洲國ノ會議所法令ニ關スル件

見ナリ

二、實業部ニテハ滿鐵會社ヲ普通會員トスル方針ナラン

實業部ニテハ商工會議所法令發布ト共ニ滿鐵會社ヲ普通

會員ト認メ會費ヲ徵收スル方針ノ下ニ目下其ノ根據ニ付

秘力ニ審議研究中ニシテ未タ賦課ノ程度等決定シ居ラス

三、會員ニ對スル賦課ノ標準

各會員ニ對スル經費賦課額ハ營業稅ヲ以テ標準トスル方針ナルカ奉天、新京、ハルビンノ如キ都市ニテハ營業稅

年額三十圓以上ヲ納ムル者管口等ノ如キハ十五圓以上

(年額)ヲ納ムル者ヲ以テ會員トナシ地方ノ事情ヲ參酌シ

區別スル方針ナリト

以上ノ如ノ法令發布ノ時期ニ關シテハ目下ノ處未決定ナル
カ遲クモ明年五六月頃迄ニハ發布ノ豫定ナル趣ナリ

本信寫送付先 外務大臣

全滿各總領事

昭和12年12月16日 在滿州國植田大使より
在シドニー村井總領事宛(電報)

輸入許可制度は自國産業保護などの觀点から產地を問わず続行するとの滿州國側意向について

1189

昭和11年12月16日 在滿州國植田大使より
在シドニー村井總領事宛(電報)

輸入許可制度は自國産業保護などの觀点から產地を問わず続行するとの滿州國側意向について

編注

本電報の發電時間が午前・午後のいずれであるかは不明。

1190

昭和12年1月15日 在滿州國植田大使より
有田外務大臣宛(電報)

外國為替管理法に基づく大藏省令の適用緩和方を滿州国内および關東州等の當業者が要望について

新 京 1月15日後発
本 省 1月15日夜着

第一七號(極祕)

貴電合第一二二號ヲ以テ御通報ノ大藏省令ニ關聯シ關東州、附屬地及滿洲國內ノ貿易業者及銀行業者ヨリ

(一)滿洲產品特ニ特產品ノ日本ヘノ輸入代金決済ノ爲ノ爲替取引又ハ信用狀取得ニ付テハ本令ノ適用ヲ免除又ハ緩和セラレ度キコト

(二)在滿銀行ヨリノ委託ニ依リ内地銀行カ他ノ銀行ニ支拂ヲ爲スコトヲ自由トサレ度キコト

等ニ付強キ希望ノ申出アリ之ニ付テハ中央ニ於テ本件ニ關シ審議ノ際ハ然ルヘク御取計相煩度シ

本令ニ關聯シ關東州及附屬地ニ於ケル措置振ニ關シ
トシテハ州内及附屬地ヘノ輸入代金決済ニ付テハ許可主義

本省 12月16日^(編註)5時発

會商第一〇七號

往電會商第一〇三號ニ關シ

在滿大使來電ニ依レハ滿洲國側ノ意向ハ大体左ノ通ナルモ

濠側力本件ヲ最惠國待遇問題ニ引懸ルカ如キハ甚々不愉快

ナレハ當分本件ニ付濠側ト話會フコトヲ差控ヘラレ度本電貴官限リノ含ニ止メラレ度シ

一、現在ノ輸入許可制ハ國內産業保護及生活必需品ノ價格調

節ノ意味ニテ之ヲ續行スルコト

二、從テ小麥及小麥粉ノ輸入ニ對シテハ對日輸入ヲモ調節ス

ルコトアルヘク同時ニ濠洲品ニ對シテモ輸入許可ヲ爲ス

コトアリ即チ理論上及表面上ハ其ノ生產地ノ如何ヲ問ハス機會均等ノ待遇ヲ與フルモノナリ

三、羊毛ノ輸入ハ當分產地ノ如何ヲ問ハス實際上制限セサル

ヘシ

(付記)

通總機密第七七號

昭和拾貳年壹月卅日

1191 昭和12年1月18日

有田外務大臣より
在滿州國植田大使宛(電報)

滿州國等に關しては外國為替管理法に基づく
大藏省令の適用を緩和し原則として為替を許
可するとの同省方針につき通報

付記 昭和十二年一月三十日付有田外務大臣より在

滿州國植田大使宛公信通總機密第七七號

右省令の運用に関する大藏省の追加説明

本省 1月18日後7時発

第一六號

貴電第一七二號ニ關シ

(一)ニ關シテハ新省令ノ適用ヨリ除外スルコト不可能ナルモ
之ヲ緩和シ原則トシテ為替許可ノ方針ナル旨大藏次官ヨリ
關東局總長宛電報濟ノ趣ナリ

(二)ハ大藏省ニ於テ承認困難ナル趣ナリ

在外大臣 有田 八郎
在滿洲國特命全權大使 植田 謙吉殿

本邦外國為替管理強化ノ大藏省令ノ運用ニ關スル件
本件ニ關シ關東州、滿鐵附屬地及滿洲國內ノ貿易業者及銀
行業者ヨリ貴官ニ申出タル希望事項ニ對スル大藏省ノ方針

ハ不敢電報シ置キタル通ナル處其後更ニ大藏省ヨリ

一、滿洲特產品ノ本邦ヘノ輸入代金決済ニ必要ナル取引ニ付
テハ現ニ原則トシテ為替ヲ許可スル方針ヲ採り居リ

二、在滿銀行ヨリノ指圖ニ基ク内地銀行ノ對銀行支拂ノ内關
東州及附屬地所在銀行ヨリノ指圖ニ基クモノハ省令第一

號第六條ノ規定ノ適用ナク昭和八年大藏省令第七號第五

條第四號ノ規定ニ該當シ自由ナリ右地域以外ノ滿洲國所

在銀行ヨリノ指圖ニ基ク支拂ニ付テハ省令第一號ノ改正
ニ依ル制限ノ撤廢ヲ考慮シ難キモ許可ニ際シ實際上不便

ナキ様取計フ方針ナル

旨通報越セルニ付右御了承相成度シ

1192 昭和12年1月26日 在滿州國植田大使より
有田外務大臣宛(電報)

外國為替管理法に基づく大藏省令実施に協力
するための満州國財政部令の公布について

新京 1月26日後発
本省 1月26日後着

第三六號

貴電合第一二號ニ關シ

爲替管理法強化ニ關スル八日附大藏省令第一號ノ實施ニ協
力ノ目的ヲ以テ財政部ニ於テハニ十六日附部令第五號ヲ以

テ「外國爲替銀行ノ海外指圖ニ依ル支拂ノ制限ニ關スル爲
替管理法ニ基ク命令ノ件」ヲ公布シ二十七日ヨリ施行スル

コトトナリタル處右部令ハ前記大藏省令第六條ト趣旨ヲ同
シクシ滿洲國ニ於ケル外國爲替銀行ハ財政部大臣ノ許可ヲ

受クルニアラサレハ外國(日本内地各殖民地及關東州ヲ除
ク)ニアル者ノ委託ニ基キ右部令ノ施行地内ニ於テ銀行(自
行ノ他ノ店舗ヲ含ム)ニ對シ支拂ヲ爲スコトヲ得ス但シ

口一萬圓相當額以下ノ送金爲替(電信爲替ヲ除ク)ノ支拂ニ
付テハ此ノ限りニアラスト爲シ居レリ

1193 昭和12年3月30日 在白城子乾(重雄)分館主任より
佐藤外務大臣宛

治外法權撤廢に伴う在滿州國日本人居留民会
解消の善後措置につき意見具申

(4月5日接受)

昭和十二年三月二十日

在白城子

分館主任 乾 重雄(印)

外務大臣 佐藤 尚武殿

昭和十二年三月三十日附第七〇號寫送付

一、治外法權撤廢ニ伴フ民會解消ノ善後措置ニ關スル件

機密第七〇號

昭和十二年三月三十日

在白城子

分館主任 乾 重雄

在滿洲國

特命全權大使 植田 謙吉殿

治外法權撤廢ニ伴フ民會解消ノ善後措置ニ關スル件

三月中旬貴電ヲ以テ治外法權ノ全面的撤廢ニ伴フ居留民會解消ノ善後措置ニ關シ民會側ノ意見取纏方御來訓ノ趣敬承仍テ管下各民會幹部筋ノ意図ヲ打診セル結果卑見ヲ交へ左記ノ通回報申進ス

記

法權ノ撤廢後ニ於テハ從來日本法規ニ基キ組織セラレタル現存民會カ自然解消セラルヘキコトニ付テハ議論ノ餘地ナク且既ニ凡ユル社會的施設ヲ滿側ニ移讓セル結果殆ント存續ノ意義ヲ失ヒタル民會ノ解消ソノモノハ別段異トスルニ當ラサルモ唯民會カ治外法權下ニ於ケル在留日本人ノ自治的團體トシテ過去久敷ニ亘リ邦人發展上重大ナル役割ヲ演

シ來リシ明カナル事實ト深キ由緒トニ鑑ミ直ニ之ヲ根本的ニ廢絶セシムルハ忍ヒ難シトスル氣持多分ナルヲ看取セラレ又斯カル感傷的氣分ヲ拔キニシテモ實際上在留邦人ノ總意ヲ代表スヘキ何等ノ機關ヲモ有セサルニ至ルコトハ折角ニ於テ民會ノ衣鉢ヲ傳フルニ足ル適當ノ團體創設方ヲ冀求スル點ハ各地民會幹部ノ衆口殆ント一致シ居ル狀態ナリ而シテ右新設團體ノ組織形態及內容ハ固ヨリ現地ノ實情ニ依リ一律ヲ期シ難シト雖大体ニ於テ在外各地ニ見ル如キ日本會ノ夫レニ倣ヒ邦人相互ノ利益増進ノ主眼トシ對外的ノ發言機關タラシムルト共ニ對内上ニハ社交的意味合ヲモ含マシメ以テ縱橫ノ結束ヲ圖ル一方之ヲ主体トシテ現在民會カ唯一ノ事業トセル神社ノ維持ヲ其儘繼承シ邦人獨自ノ敬神思想ヲ愈々進暢セシムル便トセハ其存立上一層有意義ノモノタルヘクスケテ凡ユル場合ニ於ケル邦人ノ中権統制機關トシテノ機能ハ遺憾ナク發揮シ得ヘキモノト思料セラル

尤モ近來滿洲國協和會ノ擴大強化運動ニ伴ヒ之カ日本人分

會ヲ組成スルコトニ依リ將來民會ニ代ラシムヘシトノ意見ヲ抱持シ又之ヲ當然ノ歸着ナリト信スル向アル如キモ右ハ專ラ同會直接關係者ノ唱道スルトコロニシテ民會役員タル一部少數日系官吏ノ共鳴アルニ止マリ居ル處元來協和會分

會ナルモノハ地域別ノ外職場別、職業別、民族別等種々ノ分割体系ヲ單位トスルモノナル關係上邦人在留者多數ノ地ニアリテハ動モセハ局部的對立ノ弊ニ陥リ易ク假令聯合協議會ニ於テ之カ統制ヲ計ルトシテモ夫々ノ境遇ト立場ノ相違上各種ノ利害必ラスシモ一致セサル場合ヲ生シ大同的ニ邦人自身ノ總意ヲ表示シ實行スル團體トシテ甚々適切ナラサル觀アリ而モ管下ニ於ケル同會ノ現狀ハ其掛聲ノ大ナルニ似ス依然委靡不振ヲ續ケ名實ニ反スルコト夥シク今日迄

一モ邦人關係分會ノ設立ヲ見サル如キハ其無氣力ヲ證明シテ餘リアルモノニシテ右ハ畢竟中心指導者ニ其人ヲ得サルコトモ一因ナルヘキカ率直ニ云ヘハ同會ノ精神並ニ實体力

未夕充分邦人各層間ニ徹底セス恰モ現實ト隔タル存在ナルカノ如ク思惟スルモノ多ク實際運動モ亦形式ニ流レ居ルカ

ハ到底民會解消後ニ於ケル邦人指導統制機關タルノ使命ヲ爲ニシテ同會設立ノ趣旨ハ兎モ角斯カル狀勢ノ下ニアリテ

1194 昭和12年4月13日

(在滿洲國植田大使より
佐藤外務大臣宛)

滿州國商工會議所法制定に関する実業部の方

針決定について

(接受日不明)

昭和十二年四月十三日

在滿洲國

特命全權大使 植田 謙吉

外務大臣 佐藤 尚武殿

滿洲國工商會議所法制定ニ關スル件
權撤廢、附屬地行政權移讓ニ對應スル目的ヲ以テ新ニ工商

モ連絡中ナリシカ今般實業部ヨリ別紙寫ノ通り本件工商會所法制定ニ關スル方針ヲ決定シタル旨並右制定ノ上ハ現

在全滿各地ニ設立セラレ居ル日本側商工會議所ニ對シテモ之ヲ適用スルコト致度旨内報アリタリ

尙實業部側ニ於テハ必要ニ應シ本件會議所ニ何等カノ形ニ於テ日本人部ヲ設置シ得ル餘地ヲ存シ置度意嚮ナルト共ニ

右實現ノ場合ニハ現在ニテ外務省カ日本側會議所ニ交付シ居ル補助金ヲ引續キ交付ヲ得度希望アルニ付テハ此點併セ

テ豫メ御審議置キ相煩度
右報告ス

(別 紙)

工商會議所法制定ニ關スル件(案)

第一 立法趣旨

建國後諸般ノ制度就中地方行政施設ノ整備充實セラルニ伴ヒ既存商會ノ機能組織ヲ整理改善スルノ要緊切ナルモノアルノミナラス治外法權ノ撤廢、附屬地行政權ノ調整ニ對應スルノ要アルヲ以テ茲ニ新ニ工商會議所法ヲ制定セント

第二 法案要綱

一、名稱

工商會議所トス

二、地區

特別市、市又ハ街ノ區域ニ依ル

三、目的

工商會議所ハ商工業ノ改善發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

四、事業

商工業ニ關スル左ノ事業ヲ行フ

(一)通報

(二)仲介又ハ斡旋

(三)調停又ハ仲裁

(四)證明又ハ鑑定

(五)統計ノ調査及編纂

(六)商品陳列館等ノ營造物ノ設置及管理

工商會議所ハ商工業ニ關スル事項ニ付行政廳ニ建議シ又ハ其ノ諮詢ニ對シ答申ス

五、設立

工商會議所ハ設立ノ認可アリタル日ニ於テ成立ス

議員總會ハ左ノ各號ノ議員ヲ以テ之ヲ組織ス
(一)會員ヨリ選舉シタルモノ

(二)重要產業ヲ代表セシムル爲選定シタルモノ

(三)官選シタルモノ

議員ノ定數及各號議員ノ割合ハ定款ヲ以テ之ヲ定ム

六、役員及顧問

工商會議所ニ左ノ役員ヲ置ク

(一)會長 一人

(二)副會長 三人以内

(三)常議員 議員定數ノ五分ノ一以内

會長及副會長ハ官選トシ常議員ハ議員ノ互選トス

工商會議所ハ必要ニ應シ顧問ヲ置クコトヲ得

七、部

工商會議所ハ必要ニ應シ部ヲ設クルコトヲ得

八、監督

工商會議所ハ實業部大臣之ヲ監督ス

實業部大臣ハ其ノ職權ノ一部ヲ行政官廳ニ委任スルコトヲ得

工商會議所ハ共同シテ其ノ目的ヲ達スル爲滿洲工商會議所ヲ設立ス

滿洲工商會議所ヲ設立セントスルトキハ六以上ノ工商會議所發起人ト爲リ創立總會ヲ開キ定款其ノ他必要ナル事項ヲ定メ實業部大臣ノ認可ヲ受クルヲ要ス

滿洲工商會議所成立シタルトキハ工商會議所ハ總テ之ニ加入シタルモノト看做ス

滿洲工商會議所ハ關東州、朝鮮又ハ外國ニ於テ設立シタル工商會議所ニ準スル法人其ノ他ノ團体ヲ加入セシムルコトヲ得

第三 商會ニ對スル處置

一、市及街ニ於ケル既存ノ商會ハ特ニ地區ヲ指定シタルモノヲ除キ本法施行ト同時ニ本法ニ基キ設立シタル工商會議所ト看做ス

村ニ於ケル既存商會ハ漸次之ヲ整理ス

二、特ニ指定シタル地區(日本側商工會議所ノ所在地及ニ以上ノ商會ノ併存スル地)ニ在リテハ本法施行前ニ既存商會及日本側商工會議所ハ解散セシメ該地區ニ關シテハ特ニ簡易ナル便法ニ依リ新工商會議所ヲ設立セシム

1195 昭和12年5月26日 在英國吉田大使より
孔祥熙秘書として歐米歴訪に隨行中の喬輔三中
國財政部特務秘書の滿洲國訪問希望について

ロンドン 5月27日前着

本省 5月27日後発

第二八四號

孔祥熙ハ二十五日當地發二十六日壽府、二十九日羅馬、一日巴里、四日「プラツセル」、六日柏林、同十五日頃「ハーバード」大學ニ於ケル講演ノ約ヲ果ス爲約二週間ノ豫定ニテ渡米更ニ獨逸ヘ引返シ(恐ラク英國ニハ來ラサルヘシト傳ヘラル)少クトモ六週間程「マンハイム」ニ於テ療養ヲ爲ス苦ナル趣ナルカ孔ノ祕書ニシテ其ノ「コンフィデンシャル・マター」ノミヲ取扱ヒ同人ト極メテ緊密ナル關係ニアリトノコトナル Fu San Chiao (喬輔三財政部特務秘書)ハ孔ノ戴冠式參列渡英ニ際シテモ其ノ祕書トシテ來英セル處喬ハ日支直接接近ヲ必要トストノ持論ニテ努メテ日本側ト接觸セントシ(小白元滿鐵理事トモ昵懇ナリシト言フ)居ル由ニテ今回モ特ニ孔ノ了解ヲ得テ滿洲國經由歸國(六月十

五日頃伯林發ノ豫定ナリト)在滿官民(日本人)ト親シク交

驩意見ヲ交換シ度シトノコトナルカ往電第二七九號ノ經緯モ御參照ノ上同人ノ希望ヲ容レラレ同人ノ入國通過及會見等ニ付然ルヘク便宜供與方滿洲國側ト御協議アリ度ク結果何分ノ儀御回電ヲ請フ御同意ノ場合ニハ在獨大使館ヨリ同地中國大使館氣付喬ヘ通達スルコトトシ又然ラサル場合ニハ在上海松本ノ紹介狀ヲ携ヘ當地福岡ヲ尋ね右希望ヲ申出テタルモノナルニ付福岡ヨリ其ノ旨然ルヘク斷ラシムヘシ獨ヘ暗送セリ

法權撤廢二件フ關東局ノ附屬地内課稅處理ニ

關スル件

治外法權ノ全面的撤廢ニ伴フ現行附屬地内關東局側課稅ノ移讓ニ關シ今般當地曰滿關係者ニ於テ別紙ノ通取極案文ヲ起草シタルニ付茲許送付申進ス尙右取極ハ第二次條約ニ基ク本使ト外交部大臣トノ間ノ公文ノ交換ニ依ルコトト致度處差支無キヤ何分ノ貴見御回報相煩度

(別紙)

附屬協定追加事項

(康德四、五、一一)

- 1196 昭和12年5月29日 在滿州國植田大使より
佐藤外務大臣宛
治外法權撤廢に伴う南滿州鉄道付屬地内課稅
處理案の送付について
公機密第九四一號
昭和十二年五月二十九日
(6月1日接受)
在滿洲國
特命全權大使 植田 謙吉 (印)

外務大臣 佐藤 尚武殿

二、滿洲國ハ前項ニ該當スル稅金ノ賦課ニ付テハ日本國力課稅權移讓前同附屬地ニ施行セル法令ノ規定ニ據ルヘシ相當スル純益金額ニ對スル部分ノ賦課ニ付亦同シ

二、滿洲國ハ前項ニ該當スル稅金ノ賦課ニ付テハ日本國力課稅權移讓前同附屬地ニ施行セル法令ノ規定ニ據ルヘシ

三 満洲國ハ課稅權移讓後ト雖モ營業稅又ハ法人營業稅ニ付テハ昭和十二年十一月三十日即チ康徳四年十二月三十一日迄ノ期間ニ屬スル南滿洲鐵道附屬地ノ營業ニ對スルモノニ付テハ滿洲國ノ營業稅及法人營業稅ニ關スル法

令ヲ適用スルコトナク日本國カ課稅權移讓前同附屬地ニ施行セル法令ノ規定ニ據ルヘキモノトス

四 課稅權移讓前日本國カ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セル課稅法令ニ依リ決定シタル營業稅又ハ法人營業稅ノ課稅標準ノ更訂ハ其ノ法令ニ規定セラルモノニ限り課稅權移讓後ニ於テハ其ノ決定ヲ受ケタル者ヨリ滿洲國ニ對シテ之ヲ請求スルコトヲ得ヘク其ノ請求及之ニ對スル處分ノ手續ニ付テハ其ノ請求ノ種類ニ從ヒ滿洲國ノ營業稅又ハ法人營業稅ニ關スル法令ニ規定セラル手續ニ依ルヘキモノトス

五 課稅權移讓前日本國カ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セル課

稅法令ニ依リ賦課又ハ徵收シタル稅金ノ納付免除又ハ既納稅金ニ相當スル金額交付ニ關スル處分ノ請求ハ其ノ法令ニ規定セラルモノニ限り課稅權移讓後ニ於テハ其ノ權利ヲ有スル者ヨリ滿洲國政府ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ

得ヘク其ノ請求及之ニ對スル處分ニ關スル手續ニ付テハ其ノ稅金及請求ノ種類ニ從ヒ當該稅金ト性質ヲ同シウスル稅金ニ關スル滿洲國ノ課稅法令ニ規定セラル手續ニ依ルヘシ

六 課稅權移讓後滿洲國カ第一項ニ該當スル稅金ノ徵收ニ付テハ滿洲國國ニ於ケル國稅徵收ノ手續ニ依ルヘシ但シ日本國カ課稅權移讓前ニ於テ爲シタル納稅告知、督促及滯納處分ノ爲ニスル差押ノ手續ハ課稅權移讓後ニ於テハ各之ヲ滿洲國カ其ノ國稅徵收手續トシテ爲シタル納稅告知、督促及滯納處分ノ爲ニスル差押ト同一ノ效力ヲ有スヘシ

七 課稅權移讓前日本國ノ徵收スルコトヲ得ヘキ稅金ノ滯納ニ因リテ生シタル督促手數料、延滯金及滯納處分費ニシテ課稅權移讓ノ際日本國ノ未タ徵收セサリシ金額ハ課稅權移讓後滿洲國ニ於テ之ヲ徵收スルコトヲ得ルモノトス但シ計算期間カ課稅權移讓ノ前後ニ跨ル延滯金額ノ算定ニ付テハ其ノ移讓前ノ期間ニ付テハ日本國當該法令ノ規定ニ據ルヘキモノトス

八 課稅權移讓前日本國カ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セル酒

1197
昭和12年6月24日 在滿州國植田大使より
廣田外務大臣宛(電報)

滿州國のオーストラリア産小麦粉に対する輸入制限緩和措置について

新 京 6月24日後発
本 省 6月24日夜着

第四七三號

貴電第三五五號ニ關シ(對濠輸入制限ト關聯セル滿側措置ニ關スル件)

滿側ニテハ大體左ノ趣旨ニ依リ濠洲側ニ對シ情報トシテ内報セラルコトニ異存ナキ趣ニ付御了知相成度シ、客年十二月往電第一一三五號ハノ方針運用ニ際シ滿洲國政府ハ貴電第一七三號御趣旨ニ基キ輸入總額ノ二割程度迄濠洲粉ノ輸入ヲ認ムルコト但シ()値段ノ點ニテ商談成立セサル爲輸入シ得サルコトアルヘキハ勿論トス()滿洲國市價擾亂ノ惧アル場合ハ制限措置ヲ講スルコトアルヘシ

九 課稅權移讓前日本國カ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セル課稅法令ノ違反トシテ通告處分ヲ爲シタル事件ニシテ犯則者カ課稅權移讓ノ際指定期限ヲ經過シ未タ通告ノ旨ヲ履行セサルモノハ滿洲國ニ於テ之ヲ其ノ司法機關ニ送致シテ處理スヘシ

十 課稅權移讓後滿洲國ニ於テ課稅權移讓前日本國ノ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セル課稅法令ノ違反行爲アリシコトヲ發見シタルトキハ滿洲國ニ於ケル租稅犯處罰ノ手續ニ引繼カレタル未決犯則事件ノ處罰ニ付亦同シ

二、前記輸入許可ハ日濠通商條約ノ成立ヲ前提トスルモノニシテ右條約ノ實施ト同時ニ之ヲ實施スルコト

三、毎年度豫メ割當數量ヲ決定スヘキヤ其ノ他實施ノ細目等ニ付テハ猶研究ノ上滿側ニ決定スルコト

四、本件ニ付テハ滿側ヨリ申進ムル迄ハ日濠何レモ外間ニ發表セラレサルコト

尚満洲國トシテハ同國產品ノ買入及種絶羊ノ對滿輸出制限緩和方ニ付濠洲側ニ對シ極力交渉願度シトノ希望ヲ有シ居ルニ付右然ルヘク御配慮煩度シ

本電軍側ト協議濟

1198 昭和十二年六月二十八日 在滿洲國

在滿州國植田大使より
廣田外務大臣宛

治外法權撤廃に伴う在満日本人居留民会の処理方針に関する領事會議決定について

公機密第一一四三號 (7月3日接受)
昭和十二年六月二十八日 在滿洲國

特命全權大使 植田 謙吉 (印)

外務大臣 廣田 弘毅殿

昭和十二年六月二十八日附合機密第四九六號在満各公館長

本信送付先 在満各公館長(扶餘、安東、營口、

六月二十二日領事會議ニ於テ審議ノ結果日本人民會處理方針別紙ノ通ニ決定セルニ付貴管下各民會ニ對シ右御説明ノ上至急御措置ノ上結果御回報相成度
追而協和會ニ於テモ近時中央地方共其ノ機構ヲ調整シ法權撤廃後ニ於ケル日本人關係事務ニ付テモ出來得ル限り協力方折角準備中ニ付民會解消後ニ於ケル從來民會ノ執り來レル事務ノ振向方ニ付テハ現地ノ實情ニ即應シ能フ限り協和會ヲ利用セラルコト大局上ヨリ見テ適當ナリト思考セラル御参考迄併セテ申進ス

日本人民會處理ニ關スル件 特命全權大使 植田 謙吉

合機密第四九六號

昭和十二年六月二十八日 在滿洲國

一、日本人民會處理ニ關スル件

(六公館長ヲ除ク)宛往信寫送付 件名

頭道溝、鄭家屯、百草溝ヲ除ク)

本信寫送付先 外務大臣

(別 紙)

日本人民會處理方針

民會ハ治外法權撤廃ノ時期(即チ九月末日限リ)ヲ以テ解消セシムルモノトス假令治外法權撤廃ノ時期遲ルモ民會ハ十月以降ニ於テハ學校設立者トシテノ名義上ノ存在ニ止ム從テ右ニ即應セシムル爲今後左記方針ニ依リ處理スルモノトス

一、民會現有事務ハ成ルヘク速ニ整理スルコト

(イ)從來ノ方針ニ從ヒ行政的性質ヲ有スルモノハ満洲國側ニ移讓スルコト

(ロ)他團體ヨリ委嘱ヲ受ケ居ル事務(例ヘハ國防婦人會ノ

四、治外法權撤廃ト共ニ民會ハ解消スルコト

(イ)民會解消後ニ於テハ日本人團體ハ成ルヘク一元化スル

建前ヲ採リ從前民會ノ取扱ヒ來レル事務ハ各地ノ實情ニ應シ氏子又ハ協和會等ニ於テ取扱フ様措置スルコト

(ロ)右具体案ヲ八月十日迄ニ作成提出スルコト